

育の意味はなくなるから必ず新しいことを式典に盛り込むであろう。)だから管理者として校長は、卒業式の形式を変えたり、日の丸をはずすことは自分の首にかかわる問題でもあり、大部分の教師はオリンピッククや相撲の千秋楽でも君が代は歌うという次元で片付けてしまう。「たかが卒業式で日の丸や君が代があってもどうってことはない。式典のならわしなんだよ。卒業式ってそんなに重要じゃない。日々の教育が問題だ。」とおっしゃる。どうってこともなく、重要でなければ省いてもよいはず

インタナショナルの組織

M・バクーニン

国際労働者協会に課せられた限らない任務、すべての搾取者、使用者、原料と生産手段の所有者つまり資本のすべての種類の代表者たちの軛から労働者と人民の労働を決定的に完全に解放する任務は、経済的及び物質的だけでなく、同時に同程度に社会的、哲学的及び倫理上の任務なのである。もし望むなら、それはまた政治上の任務でもある。ただし、国家の廃止による政治的なすべての破壊という意味において。

いまさら論証の必要があると思わないが、最高度の文明国家の政治、法律及び社会の現体制内の労働者の経済的解放は不可能であり、従って、それを期待し、あるいは実現するためには、現体制のすべて、国家、教会、裁判所、銀行、大学、官僚、軍隊、警察——これらは特権によって壁を高くしたプロレタリアートに対する要塞に他ならない——を破壊しなければならない。しかも単一の国でこれらを覆すだけでは十分でない。十七・八世紀

の近代国家の成立以来、すべての諸制度の間には国境を越えてつねに発展する連帯、非常に強力な国際同盟が存在するから、すべての国において覆されなければならない。

国際労働者協会に課せられた仕事とは、現存の政治的、宗教的、法律的及び社会的世界を完全に清算し、新しい経済、哲学及び社会の世界に置き換えることに外ならない。しかし、このように巨大な計画は、いずれも強力で、巨大でそして完全な二本の柱の助けがなければ実現することはできない。その一つは、人民の常に増加する経済的欠乏と苦痛とをしてそれを取り戻すための要求の強さであり、他は新しい社会哲学、実存的な人民の哲学である。それは実際の科学、いかえると実験的で同時に合理的な科学によってのみ鼓吹され、人間的原理、人民大衆の永遠の要求の表現、即ち平等と自由と全世界の連帯以外の基礎を容認しない。

人民はこれらの要求によって推し進められつつ、この原理によって勝たなければならない。この原理は、いまいったように、人民はその内部に本能的に常に保持するという意味において、人民にとってそれは他人事でもなければ、新しいことでもない。人民大衆は、彼らを抑圧するすべての軛からの解放を常に切望している。そして

だが、それはヘリクツになるらしい。重要でない卒業式、千秋楽と変わらない卒業式のために何日も練習をし、これに反対する教師や壇上にかけて上演する生徒は異端者であり、反逆者となる論理をわからせる教育が公教育なのである。

卒業式から日の丸や君が代を取り去り、自由な討論をやり、学校や教師批判をやり、でなければギターをかかえてフォークを歌い、ダンスに興じる日に変えることは一つの戦いである。
(滝沢 昇)

彼ら労働者こそ社会の養い手、文化とすべての富の創造者である故に、奴隷の最後のもの、すべての奴隷の中で最も奴隷的なものである故に、彼らと共に全世界の解放なしに解放されえない故に、彼らは常に全世界の解放、即ち普遍的自由を切望している。彼らは常に自由の最高の状態である平等を熱望し、そしてみじめにも彼らの子供たちが散り散りの個人的存在となるその中に永遠にふみつぶされつつ、いつもその救済を連帯に求めてきた。今まで連帯の喜びを経験したことがない、またあったとしてもほんの僅かであって、幸福に生きるということとは、他人、それも不幸な者たちばかりを犠牲にし、搾取し、征服して利己的に生きることを意味する。それ故に、人民大衆は友愛に覚め、実現してきた。

それ故に、社会科学とは道徳教義として人民の本能を発展させ、調整するものに他ならない。しかし、この本能と科学との間に満さなければならぬ深淵がある。なぜなら、もし正義の本能で人民の解放に足りるとしたら人民は久しい以前に解放されているからである。この本能は、人民大衆が正に暗く、悲劇的な人民の歴史的過程の中で宗教的、政治的、経済的に彼らがいつも変わらざる犠牲者であったというすべての不条理を認めることを妨げるものでない。

人民が無理になめさせられた無残な経験は、人民大衆からすべてを失わしめたのではないことも本当である。これらの経験によって、彼らの内部にある種の歴史的認識と彼らにとってしばしば理論的科学的の代りをなす伝統的経験的科学的を生じせしめた。例えば、今日西ヨーロッパのどの人民も、もはやほら吹き宗教家や新しい救世主やベテレン師政治家などに引きずられることはないだろう。また、経済的社会革命の要求が今日ヨーロッパの人民大衆の中に生々と感じられるといえる。大衆の団結本能が明瞭に、深くそしてこの意味において大胆に意思表示されるのでなかったなら、世界に社会主義者はいなくなり、彼らを煽動する才能をもった一天才のものとなるからである。人民の準備はできている。彼らは多くを耐え、この上忍耐を強制されることは少しもないこと、彼らの憧れを天国に向ける無分別に飽き、地上の無数の忍耐を耐える覚悟はもうないことを理解し始めた。大衆は一言でいえば、すべての宣伝そのものから独立して、真の社会主義者となった。パリ・コミューンがすべての国のプロレタリアトに見いだした普遍的で深い同感はそのことの証明である。

とにかく大衆、それは力であり、すべての力の基礎的要素である。彼らが忌み嫌うものの秩序を覆すために彼

民の利益とその本性に關しすべての点で一致するものでなければならぬ。ところで、人民大衆の自然的組織とはいかなるものか。それは種々の労働の種類により、人民の実際の日常生活の種々の決定を基礎とし、職業の実体による組織である。すべての産業がインタナショナルに代表され、種々の土地事業がそれに包含されるとき、その組織、人民大衆の組織は完成されるだろう。

インタナショナルの人民大衆への影響を組織する方法は、古い權威と現政府の廃絶の上に新しい權威体系と政府をつくらうとしているかのようだと非難されるかもしれない。しかしそれは根本的な誤りである。インタナショナルの人民大衆に対する組織行為は、すべての權威の外にあり、単純な思想の非官僚的自然行為という基本的な特性によって、常に政府及び国家行為とは全く區別される。国家権力とインタナショナルの力との間には、国家の官僚的行為とクラブの自然行為との間にあるのと同じ差異がある。インタナショナルは思想という大きな力以外決してもたないし、またもたないだろう。そして、全体の上にある個人の自然行為の組織にすぎない。一方、国家と国家の全構成、教会、大学、裁判所、官僚、国庫、警察、軍隊は、国家主体の思想と意思を可能にするよう買収を怠らず、そして大がいは全体に反するものだが、

らに欠けているものは何か。それは二つのこと、即ち組織と科学である。これら二つが、いますべての政治権力を構成し、そして常に構成してきたのだ。

まず、組織は科学の協力なしには成り立たない。軍事組織、軍団は武装した千人で武装しているが、非組織的な百万人を抑える、しかも効果的に抑えることができる。官僚組織の力で国家は、数十万の職員でもって国土を無限に鎖でつなく。国家の軍事権力と文官権力を粉砕しうる人民の力を作るためには、プロレタリアトは組織されなければならない。

正に、これが国際労働者協会のなすべきことである。そして、その内部に、ヨーロッパのプロレタリアトの半分あるいは三分の一あるいは四分の一あるいはほんの十分の一を包含し、組織する時、国家、諸国家はその存在はなくなるだろう。インタナショナルの組織は新しい国家あるいは独裁政治の創造ではなく、すべての支配の革新的破壊を目的とするとき、国家組織と根本的に違う性格を有しなければならぬ。国家組織は權威主義的、人為的かつ暴力的で、人民の利益とその本性の自然的發展に無関係、というよりむしろ反対のものである。一方、インタナショナルの組織は自由な、自然的なもので、人

この思想と意思を除いて、常に非常に順応性のある尺度において、法によって認められ、決定されるよう受身の服従を要求する。

国家すなわち權威であり、人民大衆を導くと自称する有産階級の組織的支配と権力である。インタナショナル、それは人民大衆の解放である。国家は決して大衆の服従以外を欲しないし、欲しようとしなから、大衆の忠誠心に訴える。インタナショナルは大衆の完全な自由以外を望まないから、彼らの反逆心に訴える。しかし、国家と国家を代表とする特権階級の支配を覆しうる力強い反逆を彼らのものとするために、インタナショナルは組織されなければならない。この目的を達成するために使う手段は二つだけである。これらは常に決して合法的でないとしても—合法ということは、常にたいてい、すべての国において特権の、いいかえると不正義の法的神聖化以外の何ものでもない—人間の権利の観点からは、これらはいずれも適法のものである。この二つの手段とは、まずインタナショナルの理念の普及であり、次に大衆を基礎とするそのメンバーの自然行為の組織である。

このように組織された行為は、大衆の自由に対する陰謀であり、新しい官僚権力を創造する企てであると主張するものに対し、我々は、彼は詭弁家か、さもなければ

馬鹿者にすぎないと答えるだろう。人類連帯の自然と社会の綻を知らず、個人と全体の相互の絶対的独立が可能であり、あるいは望むべきことだと考えるぐらい気の毒なことはない。それを望むということは、社会そのものの廃止を望むことである。というのは、すべての社会生活は個人と全体の不断の相互依存以外のものではないからである。すべての個人は彼自体最も賢く、最も力強く、殊に知と力は彼らの生活のすべての瞬間に、生産者であり同時に生産物である。各個人の自由そのものは、各個人がその真只中で生まれ、成長し、死んでいく社会が、すべての個人によって常に取囲まれた全体に及ぼす物質的、精神的及び道徳的影響の、全体による新しい再生産の合成物である。超越的で、神聖で、まったく利己的のことで自給自足の自由の名において、この影響を逃れることを望むのは、非実在的傾向である。他人にそれを及ぼすことを断念しようとするのは、すべての社会的行為、彼の思想と感情の表現そのものを断念することである。これもまた非実在に帰す。思想家と形而上学者によって大いに賞賛されるこの独立とこの意味で考えられている個人的自由―それは無である。

人間社会といっても自然と同じものに外ならないが、その中で自然に生きるすべてとは、最高の条件で、最も

界国家の実現は、歴史的に不可能であることが証明されている。國家を語るものは、必ず内部的には圧制者と搾取者、外部的には多かれ少なかれ敵意ある征服者たる意図―人道主義の否定を語るものである。世界国家とか、あるいはドイツコミュニストのいう人民国家は”國家の廃止“を意味するものでない。

国際労働者協会が國家の廃止を目的としないなら、それはまったく意味がない。それは國家の破壊のために人民大衆を組織するのである。それでは、それは人民大衆をどのように組織するのか。國家がするように、上から下へ、大衆の労働の多様性によって生ずる社会の多様性に、あるいは大衆の自然の生活に統一と人工の秩序を強制するのではなく、逆に、下から上へ、大衆の社会的存在と彼らの現実的希望を出発点として、彼らの職業と事情の自然な多様性に応じて、彼らが結束し、調和し、均衡を保つよう刺戟し、手助けするのである。

× × ×
ところで、このように下から上へ組織されたインタナショナルが、現実の、真の力となるために、各部のメンバーひとりひとりがインタナショナルの原理を更によく徹しなければならぬ。それは静かな平和時には、普及宣伝の任務を、闘いするときには、真の革命的任務を有効

肯定的に参加し、そして他人の生活の中にも同じようにこのことを認めて生きることには外ならない。それ故、この相互影響の廃止は死である。我々が全体の自由を要求するとき、個人あるいは個人グループの個人的行為が、個人に及ぼす自然的影響の廃止を要求するのではない。我々が欲するものは、人工の、特権の、法律の、官僚的影響の廃止である。たとえ教会と國家が私設機関であっても、疑いなく我々はこれらを敵とするだろう。これらの存在の権利に対して抗議しないかもしれないとしても、とはいえ、これらに向って抵抗するだろう。何故なら、そこにあるすべては、間違いなく、ただ特権階級の特別な利益のためにのみ存在するという意味での私設物であり、この目的において組織された集団の力として、権威的に、官僚的に、暴力的に人民大衆を強制させる役をなさないことはないからである。もし、インタナショナルが國家において組織されうるとしたら、強烈な味方である我々は、最も頑強な敵となるだろう。

しかし、それは國家の中で組織されることはないことは確かである。始めからそうはありえない。その名が十分そのことを示している。つまり、すべての國境を廃止するからである。正に國境なくして國家はありえない。征服國民や世界最大の專制君主らによって夢想された世

に行いうるための条件に外ならない。

インタナショナルの原理を語るとき、我々は、ジュネーブ会議で決議された総合像の前文に含まれるもの以外を意味しない。許可を求める必要はほとんどないが、ここにその要点を繰返す。

一、労働者の解放は労働者自身の仕事でなければならぬ。

二、自分たちの解放を獲得するための労働者の努力は、新しい特権を作ることにはならない。すべて（地上に生きる人間）に等しい権利と義務を樹立し、すべての階級的支配の絶滅を導かねばならない。

三、原料と生産手段の独占者に対する労働者の経済的服従は、社会的貧困、精神的墮落、政治的服従などすべての形の隷属の源泉である。

四、それ故に労働者階級の経済的解放が一大目的であり、すべての政治運動は一つの手段として、この目的に準ずべきものである。

五、労働者の解放は、単なる地方的あるいは民族的問題ではなく、逆にこの問題はすべての文明民族に関係し、その解決は必然的に理論的実践的協力的に成るものである。

六、それ故に、協会のすべてのメンバーは、真理、正

義、人道は人種、信仰、国籍の区別なく、すべての人間に向つて、彼らの指導の基礎であることを確認する。

七、最後に、彼らは協会のメンバーのためにだけでなく、その義務を果すものなら誰のためにも、人間の権利と市民の権利を要求することを義務とみなす。「権利なき義務はなく、義務なき権利はない。」

我々は今、非常に単純で、非常に正しい綱領、誇張のない穏やかな方法でプロレタリアトの最も正しい、最も人間的な要求を表わす綱領正に人間そのものの綱領である故に、その中に巨大な社会革命、現存のすべての転覆と新世界の創造のすべての萌芽を含んでいるすべてを知つた。

これこそインタナショナルのすべてのメンバーによって、今こそ鋭敏に、明瞭に理解され、実践されなければならぬものである。この綱領は、新しい科学、すべての古い宗教に代る新しい社会哲学、そして新しい政治学、インタナショナルの政治学をもたらす。そして我々は、とり急ぎ国家の廃止以外の目的をもつことはできないといつておこらう。インタナショナルのすべてのメンバーが、伝道者と革命家の二つの義務を誠実に遂行しうるために、各々がこの科学、この哲学、この政治学をできる限り、自分に徹せしめなければならぬ。労働者の経済的解放、

みんなのための生産の全体的享受、階級と政治的服従の廃止、人間的権利の充実の実現、各人の権利・義務の完全無欠の平等——一言でいえば、人類同胞愛の完成を欲していることを知り、語るだけでは十分でない。これらすべては、疑いもなく、大へん立派であり、正しい。しかし、インタナショナルの労働者がこの大真理に参加し、その条件、意識及び精神を深く研究することなく、いつまでもこの一般的形式の下にそれを繰返すことで満足しているなら、彼らはやがて空の、無益の言辞、理解されない常套句を弄すだけの危険を冒すことになるだろう。

しかし、労働者がインタナショナルのメンバーになる時、すべてが博識になるとはいえないだろうか。協会の内部に、今日可能な限り完全に、科学、哲学、社会主義の政治学を有する人間の一人があるだけでは、インタナショナルの多数のメンバーが彼らの指導と同胞愛的指揮（特に、ジャコバン派指導者ガンベッタ氏流）に従うとき、プロレタリアトの決定的解放へ人々を導かねばならない道からそれることができないためには十分でないのか。

我々がしばしば耳にする議論がある。それは、公然と述べられたのではない——余り卒直でもなく、余り活気がな

い——が、ひそかに展がり、多かれ少なかれ巧妙な故意の言い落としとか、主権者人民の最高の知恵と全能に語りかける煽動的言辞とかの種類でもって、インタナショナル内の権威ある一派によってなされている。我々はこれに對し常に熱心に闘つた。というのは、国際協会が、一方

は会員の大多数を包含し、首領の理論的実践的智恵へのメンバーによって構成され、他は専ら個人個人が指導者である幾十人かによって構成される、という二派に分かれて以来、人類を解放しなければならぬこの機構が、すべての国家の最悪のものである一種の少数者独裁国家に変形することをはつきり知つたからである。しかも、この博識で、悪賢く、洞察力のある少数者は、政府としての全責任をもって、それだけ一層専制的な権能をすべて受けとり、その独裁政治は主権者人民の意思と決定のためという追従的敬意の外観の下に注意深く身を隠す。

人民の決定は、いつだつて自称人民の意思をそのかしたものののだ。——我々にいわせれば、この少数者は、その特権的地位の必要と情況に應じ、すべての政府の類に従い、やがていよいよ独裁的に、犯罪的にそして反動的になつていく。

国際協会は、まず自らを解放するときのみ、人類解放の手段となりうるだろう。そして盲目的器械の多数派

と博識の機械屋の少数派という二派の分裂をやめ、会員各々の反映下の意識に科学、哲学及び社会主義の政治学を徹せしめるときにのみ、それが可能となるだろう。

(前田幸長訳)

(テキスト) サンティエミエ社会主義普及委員会が出版した「一八七二年人民年鑑」に収録された論文を、一九二〇年頃(正確な年月不明)ジュネーブの「レビューイユ(めざめ)」紙がパンフレットにしたもの。

海田真生個人文芸誌

「冀」第2号

「闇の飛翔」

頒価 100円

神戸市灘区岩屋北町3-4-2

戸田広介方